



**Data**

監督・脚本：陳玉勳（チェン・ユージュン）

出演：半娜（タン・ナ）／施易男（シー・イーナン）／陳進興（チェン・ジンシン）／廖慧珍（リャオ・ホイヂェン）／馬念先（マー・ニエンシエン）／黄子佼（ミッキー・ホアン）／邱秀敏（チウ・シューミン）

## 👁️👁️ みどころ

デビュー作で、高校入試を控えた主人公が誘拐される事件をユーモラスに社会問題提起した陳玉勳監督が、第2作目では恋愛モノに挑戦！

3人の主人公はそれぞれ“個性豊か”というより、ハッキリ言って“はみだし者”。そのため、バブル時代の日本で大ヒットした「トレンディドラマ」のカッコ良さはなく、どこか吉本新喜劇風・・・？

レモンパイ、ポケベル、痴漢撃退グッズ、等々のキーワードを巡る面白い恋愛ドタバタ劇(?)をしっかりと楽しみたい。

### ■□■ 陳玉勳監督の第2作は恋愛モノ。3人の主人公は？ ■□■

『熱帯魚』(95年)で鮮烈なデビューを飾った陳玉勳(チェン・ユージュン)監督の長編第2作が、原題を『愛情來了』、邦題を『ラブゴーゴー』とする本作。ハリウッドはもとより、邦画でも韓国映画でも、恋愛モノは美男美女が主役と決まっているが、陳玉勳監督は美男美女より変わり者が好きらしい。そのため、『熱帯魚』でも、主人公の中学生をはじめ、登場人物たちに美男美女はひとりも登場しなかった。それは、たった一人の例外の美女リーホァ(タン・ナ 半娜)を除いて、本作も同じだ。

本作は3人の主人公が織りなす恋愛ドラマ。主人公の第1は、冴えないアラサー男子・阿盛(アシェン)(チェン・ジンシン 陳進興)で、彼は叔母のパン屋で働くケーキ職人だ。第2はアシェンと同じアパートに住む、明るく食欲旺盛なおデブの女の子・莉莉(リリー)(廖慧珍 リャオ・ホイヂェン)。第3は痴漢撃退グッズのセールスマンをしている若者・阿松(アソン)(施易男 シー・イーナン)だ。アソンはセールスマンだから、半そでシャツにネクタイを締めている。したがって、中身は冴えないが、風貌はそれなりのもの。しかし、アシェンもリリーも、その風貌だけで恋愛モノの主人公に不向きなことがわかる。

しかして、陳玉勳監督はなぜこんな3人を主人公に？1997年の日本では、既にバブルは崩壊したものの、なおテレビ上では美男美女の恋愛ドラマが続いていた。そんな時期に、台湾ではなぜこんな恋愛モノが大ヒットしたの？しかも、アシェンを演じたチェン・ジンシンは映画の裏方スタッフ、リリー役のリャオ・ホイヂェンはテレビ業界のマネージャーと、2人とも演技はズブの素人だったにもかかわらず、2人は見事その年の金馬奨を受賞したというから、すごい。

## ■□■ショートケーキ、のど自慢大会、透明人間、初恋■□■

冴えないアラサー男子アシェンの物語のキーワードは、ショートケーキ、のど自慢大会、透明人間、初恋だ。そこには、アシェンを特訓するミュージシャン志望の友人・小徐(シュー)(マー・ニエンシエン 馬念先)と、パン屋の経営者である叔母が登場するが、話はどこかトンチンカン。また、アシェンの物語の最大のポイントは、初恋の女性リーホアがレモンパイを買うために毎日店にやってくることだが、小学生の頃2人でブランコ遊びをする中で、アメリカに透明人間に会いに行こうという約束をしていたのに、リーホアはアシェンのことをホントに覚えてないの？そんな日々の繰り返しの中、アシェンが心を込めて書いたラブレターがひょんな形でリーホアの手に届けられたが、さて、その反応は？

その後、スクリーン上はリリーの物語、続いてアソンの物語に転換していった後、再度ラストには、のど自慢大会でテレビに登場したアシェンを、リーホアが自宅で笑いを堪えながら見るシークエンスを迎えることに……。

## ■□■ダイエット、ポケベル、ポケベルの君■□■

リリーはアシェンと同じアパートに住んでいるが、これだけ大量のパンを毎日食べていれば太るのは当然。あの程度のダイエットでは効果がないはずだ。そんなおデブの女の子、リリーの物語は、ある日、道端に落ちていたポケベルを拾ったところから、まだ見ぬ「ポケベルの君」を巡って急展開していく。今やポケベルは完全な死語だが、日本でもTVドラマ『ポケベルが鳴らなくて』が大ヒットした1993年当時、これは重要な恋愛グッズだった。

当初、リリーは拾ったポケベルからキザな留守電応答メッセージを聞くばかりだったが、ある時、持ち主である喬書培(チャオ・シューペイ)(ミッキー・ホアン 黄子佼)への通話が繋がると……？互いに体型の特徴を述べ合ったため、リリーはそれまでとは一変する、懸命なダイエットに励んで晴れの会見に臨んだが……。

## ■□■痴漢撃退グッズの活用場面は？■□■

パンフレットにある、栖来ひかり氏(在台文筆家)の「惜しみなく、愛は余る。～陳玉勳のはみだした世界」が指摘するとおり、陳玉勳監督は、はみだした世界とはみだし者が大好きらしい。しかし、アシェンとリリーのはみだしぶりは顕著だが、痴漢撃退グッズのセールスマンであるアソンのはみだしぶりはそれほどでもない。むしろ、彼は世間からはみださず、まともな道を歩もうとしている若者のようだが……。

彼が、痴漢撃退グッズを最初に持ち込んだのは、アシェンがケーキ職人をしている叔母さんの店だが、所詮叔母さんには痴漢撃退グッズは不要。そのため、「若い娘が集まっているところで売らなきゃ」とアドバイスされたのは当然。そこで、アソンの物語で、彼はリーホアが経営している理容店で散髪してもらうことをエサに商品売り込もうとしたが、その首尾は？そこで起きたハプニング的な“女同士の闘い”にアソンはビックリだが、そこでアソンがカバンから取り出した商品の1つ、ピストル型の護身グッズの効用は？

陳玉勳監督の映画はストーリーの展開が全く読めないから、メチャ面白い。その後、ビルの屋上で展開される、誕生日の“ある風景”をしっかりと楽しみたい。

## ■□■本作ラストは何を暗示？■□■

『熱帯魚』(95年)でも、ラストはガラス瓶の中で泳ぐ熱帯魚が印象的で、それが“何か”を暗示していた。それと同じように、本作ラストは、ダイエットの呪縛から解放されたリーホアがハンバーガーショップで暴飲暴食をしている中で、今度は忘れ物らしき携帯電話を発見するシーンとなる。しかして、これは何を暗示しているの？リーホアの場合は、男関係も食生活も単純そのもの(?)だが、アシェンの初恋の女性だったリーホアの場合は、美人だけに男関係も複雑で、1人の恋人を巡る女同士の闘いも熾烈だ。そんなリーホアの傷ついた心を慰めたのが、のど自慢大会でテレビに映っているアシェン。しかし、それだけで2人の恋が成就するとは到底思えない。

本作を観ていると、ある程度はその後の主人公たちの人生が予測できるから、本作ラストが何を暗示しているかの答えはそれほど難しくない。『ラブゴーゴー』と題された本作では、それくらいでちょうどいいのだろう。二枚目で文武両道を備えた男性諸君や容姿端麗、絶世の美女たちには、本作のような映画は全く興味がわかないだろうが、そうでない男女は、本作を観ればくすつと笑えるし、何よりも同感できるはずだ。そんな陳玉勳の監督第2作をしっかりと楽しみたい。

2019(令和元)年10月30日記